

平和教育部会

佐藤 康尚

「特別の教科 道徳」教科書の平和教材を読む

平和教育部会は、道徳教育部会と共同で、小学校「特別の教科 道徳」の教科書の中に掲載されている戦争と平和、人権、命の大切さなどを扱う教材を検討してきました。いくつか、紹介します。

【国際理解、国際親善】

白旗の少女

(東京書籍・6年)

米軍が撮影した沖繩戦の記録フィルムの中に映しだされていた「白旗の少女」は、「わたしです」と名乗り出た、比嘉富子さんの体験がきっかけで『白旗の少女』（講談社）が原作です。

比嘉さんは、その本のあとがきで、「わたしに命の尊さを教えてくれた老夫婦をはじめ、この戦いで無念にして亡くなられた多くの方々の鎮魂の書として、また、わたしのようにならざるに戦場をさまよう子どもが

二度とあらわれぬよう、平和への誓いを新たにするための礎」となることを期待しています。

しかし、この教材のテーマは「国際理解、国際親善」。比嘉さんが渡米して、撮影したカメラマンに「感謝の気持ち」を伝える話を中心で、最後のなげかけは、「国際理解や親善のために、わたしたちにどんなことができるか、話し合ってみましょう」です。

社会科の歴史学習に合わせて沖繩戦の実相にふれたり、原作の読み聞かせなどを通して、比嘉さんが一番伝えたいことは何かを考え合ったりすることを大切にしたい、と議論しました。

【清らかな心】

母さんの歌

(日本文教出版・5年)

広島に原爆が投下された1945年8月6日の夜、ある女学生が迷子になったぼうやを抱いて「くすのき」の幹に寄りかかり、母の代わりに子守歌を歌い続け、翌朝には二人とも亡くなっていたというお話です。原作は大野充子さんの『かあさんのうた』（ポプラ社）で、国語の教材としても使われてきました。

「道徳」教科書のお話には原作と異なる箇所がいくつもあり、最後は「女学生は、どんな思いでぼうやをだきつづけたのだろう」「人間の心に感動したこと、どんなことがあるかな」となげかけています。女学生を尊い自己犠牲の姿として描いているようで気になります。

被爆者である大野さんは、あの夜、亡くなったわが子の名を叫び続けていた母親のことが忘れられず、この物語を書いたと述べています。一発の原子爆弾によって無数の親子、家族が引き裂かれ、多くの命が奪われてしまったこと、この世の「地獄」がつくり出されてしまったことなど、まずはその事実をあきらかにする必要があるのでないでしょうか。

(練馬・関町中)